

2020年7月19日 大井バプテスト教会 礼拝説教
説教題「朝ごとに、薪をくべ」レビ記6章1～6節

主任牧師 加藤 誠

**「焼き尽くす献げ物は祭壇の炉の上に夜通し、朝まであるようにし、祭壇の火を燃やし続ける。」
(レビ記6・2)「祭司は朝ごとに薪をくべ、その上に焼き尽くす献げ物を並べ、更にその上に和解
の献げ物の脂肪を置き、燃やして煙にする。祭壇の上の火は常に絶やさず燃やし続ける」(同6・
5-6)。**

礼拝は、私たちが神の息吹に触れる大切な場です。礼拝がなければ、私たちの「霊的な命」はたちまち窒息し涸れてしまいます。「霊的な命」とは、私たちの命を根源的に生かしておられる神との交わりによって注がれる命です。「身体的な命」がさまざまな危機に囲まれて窮地に陥っても、「霊的な命」においては生き活きと生かされることが起こります。神の息吹に生かされる命の不思議です。

礼拝で私たちは、神に祈り、賛美し、献げものをささげますが、礼拝で一番大切なことは、「神の言葉が語られ、聴かれること」です。私たちが生かしたもう神は、今日、私たちが神からの愛の呼びかけ・幸い・励ましを受け取り、神のもとにある喜びと希望を隣り人と分かち合って生きることを望んでおられるからです。

旧約聖書の時代、礼拝には必ず神への献げ物（犠牲の動物）が必要とされましたが、イエス・キリストご自身が神と人をつなぐ「犠牲」となってくださったので、私たちは何も持たずに、そのままで礼拝にあずかることができるようになりました。なんとこの感謝なことでしょうか。その礼拝はいつでも、どこでもささげることができます。公園でも、病室でも、夜の孤独と闘う時にも、涙に崩れ落ちた時にも、私たちはたとえ一人でも礼拝することができます。

ただ、「一人の礼拝」には限界や弱さがあります。日常生活の中で礼拝の時間を大切に取り分けることにおいて、私たちはとても弱いからです。つい自分の都合を優先し、礼拝を後回しにしてしまう私たちがいます。また、私たちは自分に心地よい言葉しか受け取れない弱さがあり、神の言葉を選び好みしてしまうことも起こりがちです。

その意味で「共なる礼拝」（教会の礼拝）がいかに大切なものであるかを知らされるのです。神が招かれた「自分とは考え方も、信仰も異なる、多様な友たち」の存在や信仰を通して、私たちは「わたしの思いではなく、神の思い、神の祈り、神の願いを求めることの大切さ」を学びます。また友の祈りや賛美、奉仕を通して受ける励ましは大きなものがあります。一緒に祈ってくれる友の存在は何とありがたいことでしょうか。もし教会の友の祈りがなければ、わたしの信仰などはとっくの間に風に吹き飛ばされていたと思います。

旧約聖書の人々は、安息日（金曜日の夕刻から土曜日の夕刻）を礼拝の日として

聖別しましたが、イエス・キリストをいただいた新約聖書の人々は、主が復活された日曜日を礼拝の日として聖別するようになりました。十字架と復活の主の招きを受けて「共なる礼拝」に集い合い、聖霊の息吹をいただいて「共なる礼拝」からそれぞれの生活の場に派遣されていく「一巡り」を大切にしました。

1952年11月に献堂された大井バプテスト教会の現礼拝堂は、その「共なる礼拝」のために用いられ、私たちはその大きな恵みをたくさんいただいてきたのです。その70年の恵みを振り返る時に、今朝ぜひ一緒に覚えたいと思ったのは、この礼拝堂が献堂された時から一日も欠かさずにささげられてきた「早天祈祷会」のことで、大谷恵護先生にうかがうと、戦前・戦中・戦後と故大谷松枝先生（初代主任牧師大谷賢二先生お連れ合い）が朝四時に起きて教会員名簿の一人ひとりに指を置いて祈りをささげてこられた早天祈祷に、教会員の有志が加わるようになり、現礼拝堂が建ち上がるると同時に「祈祷室」での早天祈祷会が始まったといひます。以来、大勢の教会員が早天祈祷に参加してこられたのですが、ひとときも長くこの早天祈祷会を支えた方として、田森つるさん、飯島正さん、そして杉田千代子さんがおられました。元旦から毎日、雨の日も嵐の日も「早天祈祷の灯りを消さない」という熱い祈りがこれらの方々によって受け継がれてきたのです。私たちの多くは主日ごとにこの礼拝堂に集い、共にささげる礼拝が教会という信仰共同体の大切な礎（いしずえ）となっていることを実感しているわけですが、けれども人々の目に隠れたところで一日も休むことなく神にささげられてきた早天祈祷の力を想います。

今朝のレビ記6章は、イスラエルの民がエルサレム神殿をいただく数百年も前、荒れ野の旅をしているときに、幕屋（移動式の礼拝所）での毎日の礼拝を大切にされた様子が記されている箇所です。祭司たちは朝ごとに薪をくべ、昼も夜も、一日中、祭壇の上に「焼き尽くす献げ物」を置いて、祭壇の火を絶やさず燃やし続けました。なぜなら、彼らの献げ物に先立って、主なる神が「昼は雲の柱、夜は火の柱」をもって、荒れ野の旅を共にし、彼らの行く手を守り続けてくださったからです。昼も夜も絶えることなく注がれる、神の大いなる恵みへの感謝と献身のしるしとして、イスラエルの民は祭壇の火を決して消さないように燃やし続けたのであり、この毎朝新たにささげられる祈りが、イスラエルの民をして苦難の歴史を神と共に歩む原動力となったことを深く心に刻みたいのです。

大井教会においても毎朝、誰よりも早く、まず先立つ神さまの恵みへの感謝がささげられ、教会員一人ひとりを覚える執り成しの祈りがささげられてきたこと、そして、その早天祈祷会の祈りが、私たちの教会を先立つ神さまの大きな恵みにつなげ続けてきたことを覚えたいのです。

現礼拝堂は約70年の役割を終えて、このたび神さまにお返しすることになりましたが、この礼拝堂において燃やし続けられてきた祈りの灯を絶やすことなく、一人ひとりが大切に受け継いでいきたいのです。